発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町二
電話3033番
編集兼発行人　平島敏治
三鉱労組印刷工場

トップは合化労連

期末手当 中心に共闘ガッチリ

大地評（大牟田地方労働組合評議会）では第二回執行委員会を開き、秋季年末闘争から、来年の四月の春期闘争を最終目標に、傘下各単産をはじめ未加入労組にも呼びかけ、共同闘争委員会を構成、すでに闘争態勢に入っている労組を皮切りに共闘支援態勢を強化した。

第二次回答も不満　東圧労組

大牟田地区の期末手当のトップを切って、東圧労組は、手取三万七千八百六十円を要求、会社はこれに対して、二万二千円（手取）を回答した。組合はこれを不満として、さる五日臨時大会を開き、八、九日スト権を確立した。

会社は十二日第二次回答として二万四千七百円（手取）を回答したが、労組は昨年より一万円下廻った要求を出し、百パーセント獲得する方針をうちたて、十六日午前七時四十五分デモによる入門を皮切りに、午後一時より二十四時間スト、十八日午後一時より四十八時間スト、二十二日午後一時より四十八時間連続ストを指令している。

プラス一万円　三染労組

三染労組は夏季期末手当要求額三万二千円（税込）にプラス一万円の四万二千円（税込）の要求書を二十日提出する。

額は意見調査で　合成労組

三池合成労組では炭労が行ったように、全組合員の意見調査を九月に行った結果、夏季手当要求額二万五千円（手取）を上廻る、三万五千三百七十八円という数字が出た。これを執行部をはじめ各級機関で討議し十月末要求書を提出する予定。

三万五千圓の要求　三煉労組

三煉労組は九月に開かれた、全鉱大会の線に沿い期末手当三万円（税込）プラス一時金五千円を三十日の期限付回答で二十日提出する回答如何では十一月十日から実力行使する準備を整えている。

生産報奨金で要求　電化労組

電化労組は秋季要求は出さず別途にこれに見合う生産報奨金要求を出す。

早く・全額が合言葉　組員合、主婦は要求する

炭労では従来までのプラス・アルファ方式をすてて、組合員各自の身近な要求であり、炭鉱の経済にマッチしたものとして一万四千五百円を正札要求として炭労大会に提案、これが決定次第期末手当の闘争に入る。

この要求に対する組合員の率直な意見を編集部では通信員を通じ打診した。

額については　従来の要求額は少なかった、他単産なみに二万円以上はとれぬかという声が多かったが、これを正札要求とするならば止むを得ないということにかわって来ているが、職組との比については不満が多い（三作、潜炭）

時期については　いつも炭労の期末手当は寒のギリギリとならぬととれず、物価高になってからの解決は不満だ、十一月中解決をほとんどが期待している。（三川、宮浦）

配分については　従来までの坑内外の奪い合いという声が少く、税金に対する不満が多い（三作）

共闘についての意見は　出発当初は非常に情報も交換され、決起大会も統一されて行われるが、解決時期になるとプツリ切れトンボでよそのことは知ってはいないという解決の仕方は共闘の信義を裏切る（三川）

主婦の一般的な意見は組合員とほとんど同じで、早く解決してもらいたい。一万四千五百円の要求はギリギリで全額必ずとってもらいたいというものが多い。

書記局便り

六日　大地評定期大会
七日　主婦会八代病院慰問
十日　九本保安部長会議
十一日　政治局合同会議
十二日　労働部長会議
十三日　中央執行委員会

前進　こんな闘いもある

前号の本紙で京の上炭鉱の闘争実態を紹介したが、このような闘いのケースは単に京の上だけでなく中小炭鉱に差しのべられる、経営者の常套手段となりつつあることに注目せねばならない。

最近の経営者の態度は小倉炭鉱を契機として人員の少い中小炭鉱に分裂政策を集中し、炭労脱退にもつて行くことが当面の目標になつているようである。このことは京の上に第二組合が発生した五月十五日前後の事情から第二組合要員として新規採用を進めている現状が典型的にこれを物語つている。

△　△

即ち既報の通り五月十五日午前四時、第二組合の張本人となつた寮生二名によつて全員起床がかけられ「福利厚生についての不満を寮独自で交渉したい」との提案がなされ副寮長が決められているがこの計画の裏には「現在の組合は頼りにならないので組合に抗議を申し込むと共に会社と独自の交渉を持つ」との煽動が行われているし、副寮長の選任にしても当初からしくまれていた芝居だつたので二名を含めた数名が会社の勤労主任等と直方の丸中食堂で第二組合結成についての打合せを行つているし、会社側代表からは「炭労なにものぞ、勝利はわれわれにあり、身分の心配はいらぬ」と激励されたことや、更にその翌日の十七日から署名運動が始められ、二十一日には寮生を発どその主体とする第一組合脱退者四十三名を出し、遂に二十七日第二組合結成式を挙げている。而もその後の工作はまさに悪質の二語に尽きる、強制配置転換や暴力的監視、不当解雇、第二組合員の二坑集約等々数えればきりが無いし不当労働行為として組合側に勝訴の判決が下つても、敢えてこれを踏みにじる鉄面皮ぶりは常識では判断できない無道ぶりである。

殊にこの政策の特徴として、あらゆる争議に適用されているのは第二組合育成の為の新規採用の方法である。彼等の手段は被採用者に対して第二組合に入るならば採用するという条件をつけること、次に第一組合員の紹介、或は身元引受けでは採用しないこと、等により漸次組合員の入営を行つているし第一組合員と家族に無言の圧力を加えるわけである。

△　△

現在第一組合が約七〇名、第二組合が約一一〇名程度と云われているが、次の段階に備えて会社が準備していることは全炭鉱と結託して炭労を脱退させ、それに成功したら一挙に第一組合七〇名を解雇しようとすることで、その為の補充採用を行つていると見られている。

このような中にあつて、七〇名の孤塁を守りあらゆる迫害と生活苦と闘いながら京の上は半歳の闘いに耐えて来た。しかも今後炭労の支援の下に今月の十五日から第四波の無警告スト、搬出阻止の闘争に立ち上ろうとしているのである。中小炭鉱の宿命とまで云われる封建的労協体質、われわれが想像も及ばないような暴政と闘うことなしに中小の救われる途はない一山の失敗はやがて全中小鉱を全炭鉱系に、そして資本家の手に渡すことになるであろう。炭労の組織防衛と、中小鉱の組合員と家族を奴隷のような労務政策から解放するために闘争支援の手をゆるめてはならない。

砂川や沖縄を守れ
基地は血と憎しみの場
阿具根参議の現地手記

いま日本の首都である東京の一角砂川では土地を守るため、アメリカの走狗となった調達庁や警官隊と血みどろな闘いが行われている。アメリカのために日本人同志が血を流す、なんと悲しいことであろうか。これが独立日本なのであろうか。現地で社会党議員団として祖国の土地を守るため、先頭に立つている炭労政治局員阿具根登参議から現地のなまなましいルポが届いた。

團結の旗の下に

東京駅から電車で約二時間、今日本の金冥目を集めている砂川の飛行基地は、東京都下でも昔の武蔵野の名残りを留めて、木立ちに囲まれた静かな村である。この田舎の立川に幅は六米位で広くはないが、コンクリートで固めた五日市街道が縦貫していて、如何にも軍事基地を思わせる。

その舗装道路に副つて、一番から九番までの横道がある（基地に近い方が一番である）。自動車がその六番に入るともう闘いの街、立川の中に飛び込んだ感じがする。道の両側の家々には小さい布に団結と染め抜いた赤旗が道に向けて立てられている。更に進めば旗が大きくなつて各単産、社会党、労農党、支援団体の赤旗のトンネルである。

突然腹ワタの中までユスブル爆音がして、家スレスレに飛び立つた飛行機が今脚を引込めている所である。

もうそこはアメリカの要請で、日本国民の意志をふみにじつている拡張予定の土地なのだ。

拡張反対の農家は殆ど全部、社会党やその他支援団体の連絡所になり、宿泊所になつている。又少しでも空いた家は各新聞社やNHKの事務所になつてそれぞれの旗印が出ている。

老婆も決死の覚悟

この広場が露天の支援隊本部になり各組織の受付けがある。その一隅に「ハリ、糸あり、簡単なつくろい致します」と書いた社会党婦人部の売店が出ている。長い闘争とヘンピなそして不自由な土地での闘いに多い時は一日に四、五回も調達庁と押し合いをやり、土地を守り、クイを打たせないため頑張り続けているが、眼も破れ、ほころびるであろう。それ等を無言で慰めているような「簡単なつくろい致します」と書いた文字にしみじみと心の温まる思いである。会う人ごとに御苦労さん御苦労さんとお互いに励まし合うが、その短い言葉に同志的愛情がにじむ。イモ畑一つ越せばもうそこは広々たる基地だ。バラ線に柵された「日本人立入禁止」のアメリカ占領地なのだ。一機、二機、三機……ゼット機や大型輸送機が一寸数え切れない程並んでいる。

心なき飛行機は小ある人の手によつて、平和な島に合掌する人の胸をねらう「原爆」が積みこまれ、そして飛行機が飛ぶようになれば一体どうなるのか、みんなよく知つている。

いたいけない子供から白髪の老人に至るまで、平和を願い、土地を守るため文字通り「決死」の覚悟で闘いを続けている。

全国民の闘いとして

がつちりとスクラムで囲まれた拡張予定地の中を総評や全学連のデモが始まる―たくましい労働歌が響く練習歌（上）右が拡張予定地（下）労働歌

権力に屈せぬ住民

その中頃に社会党国会議員連絡所（本部）があるが、右隣の農家の名札の下に大きな板が打ちつけてあつて、それにはすでに一年程前に書かれたであろう「基地拡張反対のため話し合いお断り」とあざやかに示されている。

又その先の連絡所の入口には「警察官、調達庁の立入りお断り」と書いてあつた。町の人々の土を愛する心、国を愛する心、平和を願う心が、如何なる権力にも屈せず燃えたぎつている事がよく判る。この間にも次から次にゼット機や四発の大型輸送機が飛び上るが、その度に家鳴りはするし、話は完全に途切れてしまう（経験しなくては想像出来ぬ程の爆音）

連絡所で赤ダスキを受取り、闘争の準備をして第四ゲートへ向う。途中町役場の周辺は闘う人の波だ役場の広場には鉄筋の火の見櫓があつて、その上には消防団員ならぬ見張人が出て四方をにらみつけている。調達庁の役人や警察官等が出動して来た場合は直ちに半鐘が乱打されて全員に知らされる。

心を無残にたゝきつけ乍ら、ひつきりなしに飛び上る。闘いに来た誰しもが皆言うちしている。

その飛行場の柵の前で十五、六名の婦人会のスクラムに迎えられ、日焼けした顔、白毛のまじつた髪に白の鉢巻、決死の字が特に眼をひく。永年土地と共に生きてきた人々の手が固い。

これ程までにこの土地の平和を愛し、祖先伝来の地に残り少い人生を捧げんとしているのに、何故それを追い立てんとするのか、始めは只自分の土地を守るだけであつた人々も、今はもう知つている。土地を取り上げ、幾十万の人命を流される。爆音の合間に日蓮宗のウチワダイコが鳴つている。

静まりかえつた基地内では闘争の決定に従つて、やがては我々の方向に突進して来る黒塗りの幌自動車が走り廻つている。

連絡所に引きかえして何気なく壁を見れば、桐の葉の勲章をつけた海軍の下士官の写真が何ものかを訴えるように額の中から見つめていた。

今や日本の焦点となり、全国民の闘いの場となつた基地砂川は一触即発の空気であり、日本人同志の血が流されんとしている。そして「心にクイは打たれない」の合い言葉がのぼりになつて黄金の波打つ稲田の中にはためいていた。

好況の今年こそ

国内産業の好況は三白（砂糖、セメント、化学肥料）時代から三黒（造船、鉄鋼、石炭）時代へ移行したといわれるほど、石炭はいま好況の波に乗つており、三池の港頭貯炭も山を成す暇なく売れてゆき、夏がれもしらずに過した。

石炭が久しい苦況からぬけだして、好況の波に乗り得たことは、何としても私達にとつては喜ばしいことであり、明日にあかるい希望が持てるようになつた。

しかし、大牟田の重要産業のなかで占める私たちの賃金ベースは依然として最低線である。近代化学工業の母胎をなす石炭産業の労働者が、石炭から派生する化学産業の労務者より低賃金であることは自体が全く矛盾であり、私達はこの矛盾をひつくり返して正当な座につくためにも闘わなければならない。炭鉱労務者の低賃金は全く炭鉱資本家の責任である。これを時流とか政治的問題だとかいうのは資本家の責任逃れだ。

私達にとつて年二度のボーナスは半年毎の借金の整理にしかならない。それでも、それがあるから何とか一家心中から逃れられている。好況の今年こそ要求額の百%を十一月中に支給させるよう執行部各位の努力をお願いする。

（宮浦　一採炭夫）

正しい共済会運営を

最近運動会とか台風後の家屋の修理とか、非常にもの入りが多くなつて金がいくらあつても足りない私の家みたいな家族の多いところでは喰うのがやつとで少しの金の余裕とてなく、頼みの共済会も借り過ぎているため、借りに行つても断られる始末である。

ところがどうだろう、私のきくところによると私よりみれば理由にならない条件にある人がやすやすと共済会から借つているではないか。全く正直者が馬鹿をみるとはこのことではないかと腹が立つてたまらない。この人たちは巧みに共済規程の裏をかいて、例えば旅行する知人などに頼んで大牟田を離れた他都市から「兄危篤とか姉危篤すぐこい」の電報を打つてもらい、その電報をもつて係にかけつけ、緊急の用事ということで金を借つているということである。

この他もつと悪質なことで借つている人もなきにしもあらずと思う共済会本来の目的からは大きく逸脱しているし、今後共済会の運営には厳粛な目を光らせ正しい運営を行つてもらうよう強く要望するものである。

（三川　運搬工）

俺にもいわせろ

▲みんなが云いたい事をみんなが聞くべきだ▲一口が一生を明るくする▲天性は苦労の中から